

表 1 Throat culture of KAWASAKI disease

|                         | Control                          |                          | MCLS                       |                           |
|-------------------------|----------------------------------|--------------------------|----------------------------|---------------------------|
|                         | Children<br>3552<br>cases<br>(%) | Adult<br>52 cases<br>(%) | Patient<br>36 cases<br>(%) | Family<br>58 cases<br>(%) |
| $\alpha$ -Streptococcus | 20                               | 23                       | 19                         | 19                        |
| Neisseria               | 20                               | 21                       | 19                         | 22                        |
| Sta. aureus             | 16                               | 18                       | 14                         | 9                         |
| H. parainfluenza        | 6                                | 15                       | 11                         | 16                        |
| Klebsiella              | 3                                | 4                        | 11                         | 2                         |
| E. coli                 | 3                                | 2                        | 0                          | 2                         |
| H. influenza            | 11                               | 8                        | 8                          | 7                         |
| Candida                 | 4                                | 4                        | 6                          | 0                         |
| Hemophilus sp           | 5                                | 4                        | 3                          | 5                         |
| Micrococcus             | 2                                | 2                        | 0                          | 2                         |
| Sta. epidermidis        | 1                                | 0                        | 0                          | 5                         |
| $\beta$ -streptococcus  | 3                                | 2                        | 0                          | 2                         |
| Enterobacter            | 1                                | 2                        | 3                          | 3                         |
| A. Calcuttensis         | 1                                | 0                        | 3                          | 2                         |
| Pseud. aureginosa       | 1                                | 4                        | 0                          | 0                         |
| Other's                 | 6                                | 2                        | 3                          | 5                         |

スキー改良培地の3種に植えた。

#### 成 績

患児で、 $\alpha$ -streptococcus, Neisseria が各々19%みられ

たが、対照との差はみられなかった。患児における  $\beta$ -streptococcus の検出率は0%であった。患児家族と成人対照との比較においても、 $\alpha$ -streptococcus, Neisseria が19%, 20%と対照の23%, 21%との間に差はみられず、他の菌においても同様であり、 $\beta$ -streptococcus は、2%の検出率で対照と同じであった。

#### 考 按

前年度に引き続き、著者らは、本症の原因に何らかの感染が Trigger になっているのではないかと考え、53年度一年間の川崎病患児36例、及びその両親の咽頭培養を行ない、対照群と比較検討してみたが、何ら有意の差はみられなかった。又、以前より  $\beta$ -streptococcus との関係が推測されているが、患児においては検出率は0%であり、親においても2%と、対照群と同率の検出率であった。患児咽頭培養は、来院前すでに抗生物質の使用されている例も多く、十分な結果が得られない事が多い。細菌感染により発症するとするならば、家族咽頭培養において、原因菌が発見されるのではないかと考え、両親の咽頭培養も行なってみたが、何ら特異的所見は得られなかった。本症の発症に季節差、同胞発生がみられ、感染症の関与は否定しきれず、今後更に検討を加え、研究を続けるつもりである。

## MCLS における尿中白血球の意義

東京女子医大第二病院小児科 保 科 真 美  
伊 川 あ け み  
松 井 光  
浅 井 利 男  
森 川 由 紀 子  
草 川 三 治

#### はじめに

川崎病の急性期に、尿中白血球数が増加することは、いくつかの報告がありよく知られていることである。今回、われわれは、1971年より1977年までの7年間に、東京女子医大第二病院小児科に入院した川崎病138例において、膀胱穿刺尿と経尿道尿の尿中白血球数の比較、尿中白血球数と冠動脈病変との関係および、尿中白血球数

と筆者らの冠動脈造影の適応を決定するスコアとの関係を検討し、興味ある結果をえた。

#### 対象および方法

対象は1971年より1977年までに当科入院となった138例で(男85例, 女53例)年齢分布は1歳未満44例, 1歳台が39例, 2歳台が21例, 3歳台が11例, 4歳台が15例, 5歳以上が8例であった。入院病日は、最も早いもので

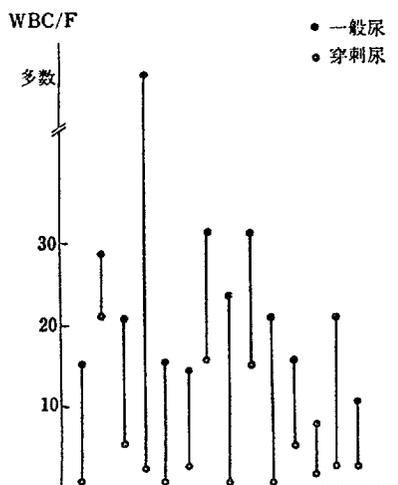


図1 一般尿と穿刺尿における沈渣中白血球数の比較

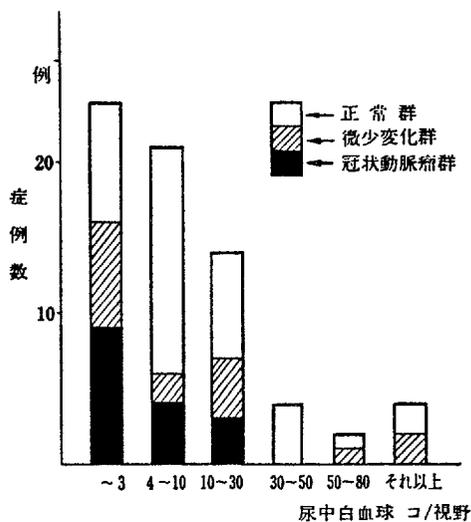


図2 病日1週以内に入院となったMCLSにおける尿中白血球数とカテデータとの関係

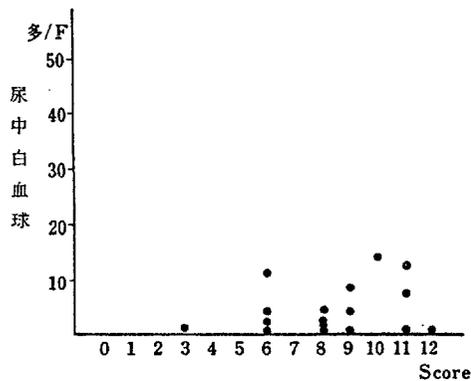


図3 冠状動脈瘤の認められた例のScoreと尿中白血球の関係(入院時)

第3病日、遅いもので、第30病日、平均7.6病日であった。第1病週以内に入院したものは、97例であった。

結果

1. 膀胱穿刺尿と経尿道排泄尿の比較

入院時一般検尿中白血球の増加していた症例は、138例中86例(62%)であった。このうち17例について尿中白血球の起源を検索すべく膀胱穿刺をおこない、穿刺尿と一般尿を比較した。その結果は、第1図に示すように、17例中14例(82%)に有意の差で一般尿中白血球の方が、穿刺尿中白血球より増加していた。しかし、穿刺尿中にも3~20コ/視野に増加しているものが、17例中6例あった。なお、一般尿中白血球が正常化した病日は、早い

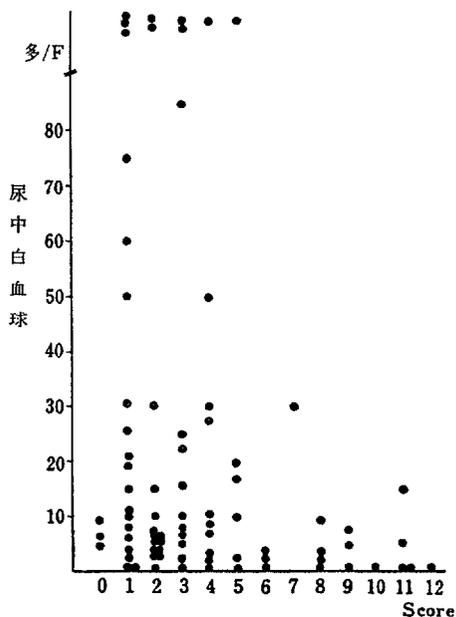


図4 1週以内に入院した症例のScoreと尿中白血球の関係(入院時)

もので第6病日、遅いもので第50病日、平均19.1病日であった。

2. 尿中白血球数と冠状動脈造影所見について

第1病週以内に入院した97例において、冠状動脈造影

を施行した67例を対象に、入院時尿中白血球数と造影所見との関係を検討した。冠状動脈検査を施行した69例の所見は、動脈瘤のあったものが16例、微細変化（蛇行、狭窄など）がみられたものが16例あり、37例は正常であった。これら冠状動脈所見と尿中白血球数との関連についてみると、第2図に示すように、白血球が30コ/視野以上であった例では、後遺症としての冠状動脈瘤を残した例はなかった。微細変化例、正常例では、相関関係は認められなかった。

さらに冠状動脈瘤を残した例について、スコアも加え検討してみると、第3図に示したように、スコアでは1例を除き6点以上で、入院時尿中白血球数が15コ/視野をこえた例はなかった。

### 3. 尿中白血球数とスコアの関係について

第1病週以内に入院した97例において、入院時尿中白血球数と筆者らのスコアとの関係を検討した。第4図に示したように、尿中白血球数が多数/視野の例では全てスコアが5点以下であった。また、スコアも6点以上の例では、尿中白血球数が30コ/視野をこえる例はなかった。全体的にスコアが低いものほど尿中白血球が多いという傾向がうかがわれた。

## 考 按

川崎病の急性期に尿中白血球が増加することは知られていることであるが、この白血球がどこの部位に由来するものかを決定するために膀胱穿刺を施行した。この結果、主に尿道に由来するが、穿刺尿中にも軽度の増加がみられる例もあるため、膀胱より上部の炎症も関与している例があると考えられる成績をえた。

尿中白血球数と冠状動脈造影所見およびスコアとの関係の比較検討においては、入院時尿中白血球数が、多数/視野の例はスコアが5点以下であり冠状動脈瘤を残した例はなかった。全体的にみると、スコアが高くなるほど、尿中白血球は少なくなる傾向がみられた。

これらの所見を総合的に考えてみると急性期に泌尿器系の炎症を含む粘膜症状の強いものは、川崎病としては軽症で冠状動脈後遺症もほとんど残さない。反対に粘膜症状の軽いものは、ごく軽症にすんでしまうものと、冠状動脈後遺症を残すような重症のものがあるといえる。尿中白血球数は入院時すぐわかる検査であるので、全身状態の重く血液検査も悪いのに尿中白血球が少ない場合は重症化を予想することができ、有用であると考ええる。今後尿中白血球分画や上皮の形態などについて、さらに検討する予定でいる。

## 川崎病に関する 2, 3 の知見

京都大学小児科 奥 田 六 郎  
四 宮 敬 介

### I. 家族の咽頭菌培養

1. 本人 2才 男 常在菌のみ  
父 常在菌のみ  
母 H.influenza
2. 本人 0才 男 常在菌のみ  
父 Klebsiella  
母 常在菌のみ  
双生児の兄弟 常在菌のみ
3. 本人 1才 男 常在菌のみ  
父 常在菌のみ  
母 Klebsiella

以上の3例のみ施行し得たが検討は不能である。

### II. アスピリン療法

昭和48年以来、我々はアスピリン療法（体重1kgあたり100mg）を提唱し約80例の川崎病患児にアスピリン単剤の投与を行ってきたが現在までに1例も動脈瘤病変をきたしたものはない。昭和53年に1例のみ症状の経過途中に急速な血小板の減少、フィブリノーゲンの減少、PT、PTTの延長、FDPの軽度上昇を認めた為にはヘパリンおよびウロキナーゼの併用療法を行ったものがあったが、冠動脈造影にて異常を認めなかった。症例数が少ないことは否めないが現在冠動脈瘤の発生頻度が約10%と報告されていることから判断すれば、1例の発生もみていないことは不思議である。今後尚検討をつづける予定

↓ **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

はじめに

川崎病の急性期に、尿中白血球数が増加することは、いくつかの報告がありよく知られていることである。今回、われわれは、1971年より1977年までの7年間に、東京女子医大第2病院小児科に入院した川崎病138例において、膀胱穿刺尿と経尿道尿の尿中白血球数の比較、尿中白血球数と冠動脈病変との関係および、尿中白血球数と筆者らの冠動脈造影の適応を決定するスコアとの関係を検討し、興味ある結果をえた。